

社会福祉学部学生の人間観に関する調査※

——日本的自己とのかかわりから——

石井富美子¹・矢澤圭介¹・清水海隆²※※

1 はじめに

ここでは人間が自己、他者、そして自他の人間関係について抱く、総体的なイメージを「人間観」と定義する。とするなら、歴史文化的に規定されて、一般的に日本人はどのような人間観を持っているのであろう。それは欧米社会の個人主義に立脚した人間観とは異なると言われ、個人主義と対比する形で、これまで甘え（土居，1971）、間人主義（浜口，1982）、日本の自我（南，1983）等の概念が提唱されてきた。これらの論者が共通して指摘するのは、「自他の区分が曖昧で、主体としての『個』の意識が乏しく、自己意識の内容が周囲の他者に強く規定される」という日本人の特質である。しかし、明治以来の西欧化、特に第2次世界大戦以後のいわゆる民主化の流れが、現代日本人の人間観を個人主義化していることも否めない。伝統的な人間観と個人主義的な人間観とが混在しながら、時に矛盾葛藤しているというのが現代日本人の姿と言えるだろう。実際、高田ら（1995）は前記の諸概念に基づき質問紙を構成し、その因子分析によって「分け隔てのない親和性」、「身近な他者への配慮」、「個人の自立」、「他者評価への懸念」、「他者への信頼感」、「排他的な自分本位」、「他者評価への防御姿勢」という7つの日本的自己の下位様態を見いだしている。そこでは、伝統的な人間観と個人主義の人間観とが混在している。

ところで、手近にある社会福祉の方法論に関する本（藤田，1990）を開くと、そこには「自己決定」、「個の受容」といった概念が散見される。ここから窺えるように、現在の社会福祉の方法論の根底にある原理は、個人主義の人間観に立脚していると言って間違いないであろう。社会福祉の基本理念は「弱者救済」から「ヒューマン・ウェルビーイング」へと変化しつつあると言われて久しい。その理念の実現のためには、個人の自己実現を生涯にわたって援助するシステムと方法論の開発が望まれる。その時、日本人のリアルな人間観とは若干くい違ひ、個

※A research on the human images of the students of the department of social welfare: Their structure of self in Japanese culture

※※Tomiko Ishii¹, Keisuke Yazawa¹ and Kairyu Shimizu² 1. 立正大学社会福祉学部人間福祉学科 2. 同社会福祉学科
キーワード：社会福祉学部学生、日本的自己、個人の自立、対人関係重視

人主義に依拠した欧米からの移入原理が支えでは、真に有効な援助を行えるのであろうか。建て前では個の尊厳をうたいながら、援助の実際においては日本的な状況対応的処遇がなされる。そんな危惧も感じるのである。筆者らは、日本人の間人観を青年、壮年、老年と生涯発達の、さらに施設職員、行政の相談機関職員といった社会福祉従事者別に調査していく計画を持っている。そこに明らかになる間人観の一般性と差異性とは、日本社会に有効な社会福祉の方法論的原理を検討する一助になるはずである。

ここで強調しなくてはならないのは、筆者らが個人主義と対置した形で日本の間人観を考え、それに基づく日本型福祉の原理を検討しようとしているのではないということである。高田ら（1995）の研究で明らかなように、日本的自己には個人主義の間人観も重要な要素として含まれるのである。ただ、そこには個人主義では律しきれない日本的なものが多分にある。そうしたものを切り捨てずに、援助の方法論的原理の幅を広げていくことを摸索するのである。研究の方向性をスタートの地点で云々することは、軽率の謗りを免れない。しかし、あえて見通し的に言うならば、「日本的な自己決定」、「日本的な個の受容」等の検討がその内容となるであろう。現在の方法論的原理の中に、社会・文化を超えた普遍的要素を認めていくことも視野に置いているのである。

以上のような計画の第一歩として、今回は本学社会福祉学部1年生（第1期生）がどのような間人観を持っているかを調査する。彼らは、発達の青年後期に位置すると同時に、社会福祉を志す者として、青年一般（平均像）とは若干異なる特性を示すと予想される。高田ら（1995）は、青年（地方国立大生、平均年齢20.3歳）と成人とを日本的自己の在り方について比較している。その結果、青年は「個人の自立」をやや否定し、逆に「排他的な自分本位」をやや肯定し、そして「分け隔てのない親和性」を極めて高く肯定するのである。そして、彼らは「他者評価への懸念」、「他者評価への防御姿勢」といった伝統的な間人観を、成人より強く肯定するのである。これらの結果を高田らは、「青年が自己を再構成してゆく際に、個としての存在に気づくことよりも、現行の社会システムに適合した自己のあり方を、積極的に取り込もうとしている可能性を示唆する」と考察している。果たして本学社会福祉学部学生も同様の結果を示すであろうか。

高田らの研究に見られた青年の特徴には、1つには競争志向の現代社会の影響が、そして他者からの眼差し意識の強さという、青年に特徴的な心性が反映していると考えられる。そこで、今回の調査では、自己充実的達成動機と競争的達成動機という達成動機の2側面（堀野ら、1991）、そして公的自意識と私的自意識という自意識の2側面（菅原、1984）を人間観とともに測定し、それらと人間観との関係も検討したい（それぞれの概念の定義は2のa「調査方法」を参照）。また、日本的自己の形成には、日本の伝統的な宗教が大きく影響してきたと考えられる。そして、社会福祉の実践は、人生の苦悩とか死といった現実と触れ合う機会が多い。利用者が宗教によって癒されるというケースに出会うこともあるであろう。そこで、今回の調査では、宗教意識についても問い、その結果と人間観との関係も検討する。最後に、人間観・

達成動機・自意識・そして宗教意識の特性が、学生の生活感情におけるどの側面の満足と関連するかを検討して、それぞれの特性の適応の意味も明らかにする。本研究の特色は、人間観とともにそれを取り巻く諸変数を同時に測定することによって、社会福祉学部学生の人間観を「立体的に」浮かび上がらせようとする点にある。

2 調査の方法と結果

a 調査方法

調査対象者： 本学社会福祉学部社会福祉学科1年生，142名。内訳は，男子51名，女子91名。平均年齢は，18.9歳（18～21歳）。調査時点において入学後約7カ月で，社会福祉の専門の学習はまだ極めて浅いと言える。

調査手続き： 筆者らの1名の授業において質問紙を配布し，その者が記入方法の説明の後，各質問項目を順次読み上げて回答を求めた。調査実施時期は，1996年10月。

質問紙の構成： 人間観については，「日本的自己」として高田ら（1995）の7因子から5因子を採用し，因子負荷量の大きさと概念的観点から項目を若干取捨選択して，次ページ以下の表1の尺度（下位様態）とそれぞれのアンケート項目を構成した。「対人関係重視」は，高田らの「分け隔てのない親和性」から日本的自我と甘えに由来する項目を除去して，間人主義的に純化したものである。間人主義（浜口，1982）とは，個人主義と対置して，日本社会の特質を「①相互依存主義—自己中心主義，②相互信頼主義—自己依拠主義，③対人関係の本質視—対人関係の手段視」として捉える理論である（対概念の前が間人主義，後が個人主義の特質）。「ウチへの甘え」は，「身近な他者への配慮」から日本的自我に由来する項目を除去して，甘え的に純化したものである。ここで，甘え（土居，1971）とは，日本人の特色を「自他の未分化」，「ウチ・ソトの区分」，「集団への埋没」として捉える理論である。「他者への信頼」と「利己主義」は尺度名のみを若干修正，「個人の自立」はそのままである。なお，別途に自意識を測定するため，高田らの「他者評価への懸念」と「他者評価への防御姿勢」は除去した。尺度の定義については，表1の「測定しようとする心理的内容」の欄を参照されたい。

達成動機は，「社会的・文化的に価値あるとされたことを成し遂げること」と定義されて研究が進められてきた。そこでは，他者をしのぎ，他者に打ち勝つという競争的な意味合いが示唆されてきたといえる。しかし，最近の研究では，達成動機を多側面的に捉える試みが増えてきている。ここでは，競争志向的社会の影響を直接的に受けとめる競争的達成動機と，自分の内面的な達成基準への到達を目指す自己充實的達成動機（堀野ら，1991）とを尺度として取り上げ，因子負荷量を考慮してそれぞれ10，11項目を採用した（表1参照）。

自意識の下位様態として公的，私的自意識は，ともに自己に注意を向ける傾向に関するものとしては共通だが，公的自意識は自己の外面に対する注意，私的自意識は自己の内面に対する注意という点で異なる（菅原，1984）。公的自意識の高い者は，他者からの評価的態度に敏感

表1. 各尺度の概念と各尺度を構成するアンケート項目

[illegible]

達成動機	自己充實的達成動機	<p>他者・社会の評価にはとらわれず、自分なりの達成基準への到達をめざす達成動機</p>	<p>33. 何でも手がけたことには、最善をつくしたい。 35. 何か小さなことでも、自分にしかできないことをしてみたい。 36. いろいろなことを学んで自分を深めたい。 38. 人に勝つことより、自分なりに一生懸命やるのが大事だと思う。 41. 決められた仕事の中でも、個性を生かしてやりたい。 43. 難しいことでも、自分なりに努力してやってみようと思う。 44. こういうことがしたいなあと考ええると、わくわくする。 47. みんなに喜んでもらえる、すばらしいことをしたい。 49. ちょっとした工夫をすることが好きだ。 51. いつも何か目標をもっていたい。 53. 結果は気にしないで、何かを一生懸命やってみたい。</p>
	競争的達成動機	<p>他者をしのぎ、他者に勝つことで社会から評価されることをめざす達成動機</p>	<p>34. 競争相手に負けるのはくやしい。 37. どうしても私は、人より優れていたいと思う。 39. 社会の高い地位をめざすことは重要だと思う。 40. 他人と競争して勝つとうれしい。 42. 勉強や仕事を努力するのは、他の人に負けないためだ。 45. ものごとは、他の人よりうまくやりたい。 46. 世に出て成功したいと強く願っている。 48. 就職する会社は、社会で高く評価される場所を選びたい。 50. 成功するということは、名誉や地位を得ることだ。 52. 今の社会では、強いものが出世し、勝ち抜くものだ。</p>
自己意識	公的自意識	<p>自己の服装や髪型、あるいは他者に対する言動など、他者が観察しうる自己の側面に注意を向ける程度に関する個人差</p>	<p>54. 自分についてのうわさに関心がある。 55. 人の目に映る自分の姿に心を配る。 57. 自分が他人にどう思われているか気になる。 61. 他人からの評価を考えながら行動する。 62. 人前で何かする時、自分のしぐさや姿が気になる。 63. 自分の発言を他人がどう受け取ったか気になる。 69. 人に見られていると、つかつかうをつけてしまう。 70. 人に会う時、どんなふうにもふるまえば良いのか気になる。 71. 自分の容姿を気にするほうだ。 72. 初対面の人に、自分の印象を悪くしないように気づかう。</p>
	私的自意識	<p>自己の内面や感情、気分など、他者からは直接観察されない自己の側面に注意を向ける程度に関する個人差</p>	<p>56. しばしば、自分の心を理解しようとする。 58. ふと、一歩離れた所から自分をながめてみることもある。 59. 自分がどんな人間か自覚しようと努めている。 60. 他人を見るように自分をながめてみることもある。 64. その時々、の気持ちの動きを自分自身でつかんでいたい。 65. 自分で反省してることが多い。 66. つねに、自分自身を見つめる目を忘れないようにしている。 67. 自分が本当に何をしたいのか考えながら行動する。 68. 気分が変わると、自分自身でそれを敏感に感じ取るほうだ。</p>

宗教意識	宗教の価値	宗教をどんな側面からどの程度評価しているか	<p>73. 宗教・信仰は、心に安らぎ・落ち着きを与える。</p> <p>74. 宗教・信仰は、願いや望みをかなえてくれる。</p> <p>75. 宗教・信仰は、困難に立ち向かう時のやる気・勇気を与えてくれる。</p> <p>76. 宗教・信仰は、自分の人生の指針となる。</p> <p>77. 宗教・信仰は、悪魔・悪霊・悪い運命から自分を守ってくれる。</p> <p>78. 宗教・信仰は、死後の救済や成仏・往生を保証してくれる。</p> <p>79. 宗教・信仰によって、再生・復活・輪廻がよりよく行える。</p>
	宗教的信条	宗教について、どのようなことを、どの程度信じているか	<p>80. 神仏の存在を信じている。</p> <p>81. 経典などの教えを信じている。</p> <p>82. 天国・地獄の存在を信じている。</p> <p>83. 運命・報いということを信じている。</p> <p>84. 神秘的な力の存在を信じている。</p> <p>85. お守りやお札などの力を信じている。</p>
	宗教的実践	宗教について、どのようなことを、どの程度実践しているか	<p>86. 常に礼拝・お勤め・修業・布教など宗教的実践をしている。</p> <p>87. 時々、お祈りやお勤め等をしている。</p> <p>88. 年に1～2回程度、先祖の墓参りをしている。</p> <p>89. 経典等の宗教関係の本を、時々読んでいる。</p> <p>90. 身の安全・商売繁盛・入試合格を祈りに、お寺や神社に行く。</p> <p>91. お守りやお札等を自分の身の周りに置いている。</p>
生活実感	対人関係	日常生活の中で他者に向けられる、あるいは他者との関係で生じる感情	<p>92. 私は友だちと、とても気持ちが通いあっている。</p> <p>98. 私には、心から親友といえる友だちがいる。</p> <p>99. 私は、周囲の人たち（友だち・家族など）に受け入れられている。</p> <p>104. 私は、周囲の人たち（友だち・家族など）の期待に応えたい。</p>
	自己認知	日常生活の中で自己に向けられ、あるいは自己に感じられる感情	<p>93. 私は、自分の良さが分かっている。</p> <p>94. 私は、今の自分に誇りを持っている。</p> <p>100. 私は、有能で可能性に富む人間であると感じる。</p> <p>105. 私には、人より優れた何かがあると感じる。</p>
	現実目標	日々の生活における現実目標の達成に関わる感情	<p>95. 日々の生活の中で、熱中する（没頭する・打ち込める）ことがある。</p> <p>96. 日々の生活の中で、何かを成し遂げる喜びを感じている。</p> <p>101. 日ごろはりのある生活を送っていると感じる。</p> <p>106. 私は、日々の生活の中で生きる喜びや実感を味わっている。</p>
	理想目標	将来の理想目標達成に関わる感情あるいは将来展望により生じる感情	<p>97. 私は自分に適した、理想とする職業に就くことができると感じる。</p> <p>102. 私は、自分の将来に希望を持っている。</p> <p>103. 私には、生きていく上での目標があると感じる。</p> <p>107. 私は、自分の生き方は自分で決められると感じる。</p>

で、他者の視線を意識して自己表出を変える傾向がある。したがって、対人不安を示しがちである。他方、私的自意識の高い者は、その時々での自己の意見、態度を自覚しているため態度と行動との一貫性が高いとされる。ここでは、逆転項目を除いて、前者について10、後者について9項目で尺度を構成した(表1参照)。

宗教意識については、世界青年意識調査(1978)の「人生にとって宗教や信仰はどの程度大切なものだと思うか」という質問項目から「宗教の価値」尺度を構成した。また、NHK世論調査(1978)の「宗教や信仰に関係すると思われることがらで、信じているものは何か」という複数回答の項目を、単答(数量)回答化して「宗教的信条」の尺度を作った。そして、同じくNHK世論調査の「宗教や信仰に関係すると思われることがらで、行っているものは何か」という複数回答の項目の項目を、単答(数量)回答化して「宗教的实践」の尺度を構成した(表1参照)。

生活感情は、内田(1990)から、対人関係、自己認知、現実目標、理想目標のそれぞれについて、肯定項目のみ4項目を採用して尺度を構成した。それぞれの尺度の定義は、表1を参照されたい。生活感情は、他の諸尺度の生活適応との関係を検討する目的で設定されたものである。

以上の4構成概念、16尺度、計107質問項目によって質問紙を構成した。

各項目への回答は、「かなり(そうである)」、「やや(そうである)」、「どちらとも(いえない)」、「あまり(そうではない)」、「まったく(そうではない)」の5選択肢の中から、「自分(の考え)にもっとも当てはまると思うところ1つ」を選択させる、5件法であった。各項目への回答以外に、調査対象者の個人属性として所属学部・学科、学年、性別、年齢を記入させた。質問紙への回答にあたって調査対象者には、答に正誤はないこと、結果は統計的に処理するので個人の結果を問題にすることはないことを伝えた。

b 調査結果

(1) 尺度の平均値による社会福祉学部学生の間観等の特質の分析

5件法の回答の「まったく(そうではない)」に1点、「あまり(そうではない)」に2点、「どちらとも(いえない)」に3点、「やや(そうである)」に4点、「かなり(そうである)」に5点を与えた。各調査対象者の尺度毎の平均値を算出し、その男女別、総計の平均値を各尺度毎に示したのが表2である。ここで、回答に欠落値があった場合には、その項目を除いた、尺度を構成する項目の平均を個人の尺度平均値とした。表2の結果を「対人関係重視」等16尺度のプロフィールとして図示したのが、図1である。図では、平均値が3.0を超すか否かがポイントとなるため、3.0(中立点)の水準を点線で示してある。図1から、次の諸点が指摘できる。

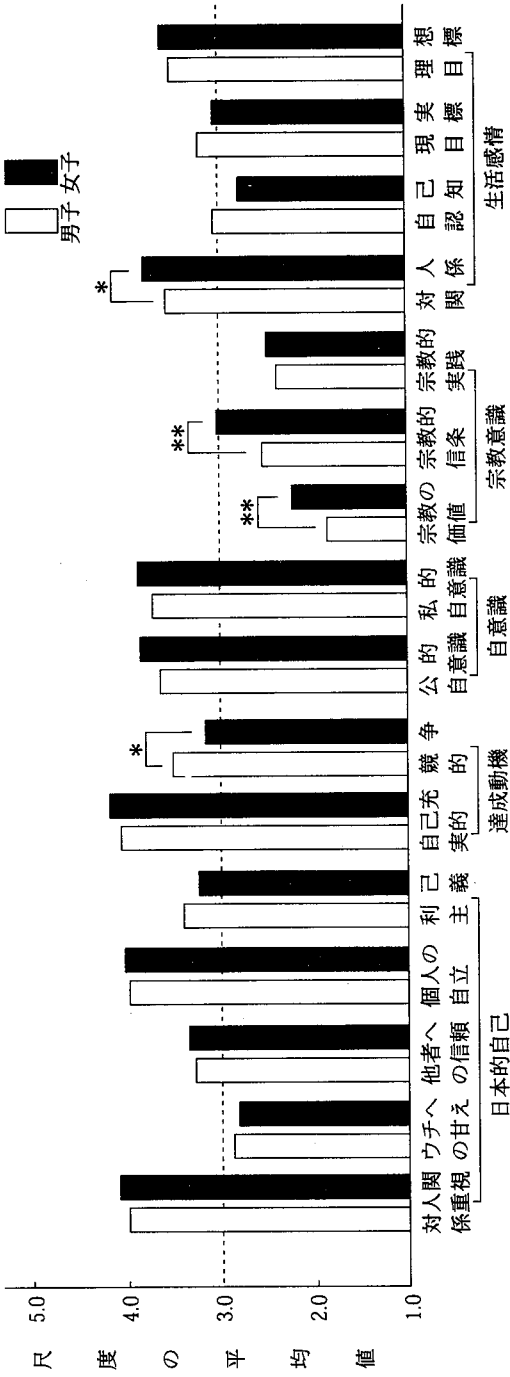
① 人間観(日本的自己)の中では、「対人関係重視」と「個人の自立」がいずれも4.0を超える平均値を示して高い。逆に、「ウチへの甘え」は3.0よりも低く、特に女子では1%水準で有意に低い。そして、「他者への信頼」と「利己主義」はともに3.0以上で(1%水準で有意)

表 2．各尺度の男女別平均値

	日 本 的 自 己				達 成 動 機		自 意 識		宗 教 意 識		生 活 感 情					
	対人関 係重視	ウチへ の甘え	他者へ の信頼	個人の 自立	利己主義	自己充 實的	競争 的	公 的	私 的	宗教的 価値	宗教的 信条	宗教的 実践	対人 関係	自己 認知	現 実 目標	想 象 目標
男 性 (N = 51)	4.03** (.45)	2.86 (.54)	3.29** (.68)	4.02** (.45)	3.43** (.70)	4.10** (.42)	3.41** (.52)	3.64** (.85)	3.71** (.73)	1.82** (.90)	2.53** (.95)	2.35** (.86)	3.54** (.67)	3.01 (.92)	3.21 (1.00)	3.52** (.78)
女 性 (N = 91)	4.12** (.39)	2.83** (.44)	3.37** (.59)	4.06** (.44)	3.27** (.60)	4.22** (.45)	3.17** (.57)	3.84** (.63)	3.88** (.62)	2.22** (.75)	3.00 (.79)	2.48** (.64)	3.80** (.60)	2.82* (.79)	3.06 (.91)	3.62** (.76)
計 (N = 142)	4.09** (.41)	2.84** (.47)	3.34** (.62)	4.04** (.44)	3.33** (.64)	4.18** (.44)	3.26** (.56)	3.76** (.72)	3.82** (.66)	2.08** (.82)	2.83* (.88)	2.43** (.73)	3.70** (.64)	2.89 (.84)	3.11 (.95)	3.53** (.77)

注. () 内はS.D. * は P<.05, ** は P<.01で中立点(3)から有意に異なることを示す。

| * は P<.05, | ** は P<.01で性差があることを示す。



注. * は P<.05, ** は P<.01 で性差があることを示す。

図 1．社会福祉学部学生の「対人関係重視」等16尺度の平均値によるプロフィール

3.5以下である。そして、いずれでも性差は認められない。これらの結果は、高田ら(1995)の青年の示した傾向とは異なる。社会福祉学部学生も「対人関係重視」や「他者への信頼」という伝統的人間観を示す点では彼らと変わらない。しかし、社会福祉学部学生は彼らでは極めて低かった「個人の自立」を高く評価しているのである。

② 達成動機では、自己充實的達成動機が4.0を超える高い平均を示して性差はない。一方、競争的達成動機は3.0を超えている(1%水準で有意)とはいえ、自己充實的達成動機より明らかに低い値を示し、男性が女性より高いという性差が見られる($t=2.49$, $df=140$, $p<.05$)。つまり、社会福祉学部学生では、競争的達成動機より自己充實的達成動機への志向性が高く、その傾向は特に女子で強い。

③ 自意識では、公的・私的ともに3.5を超える平均を示してほぼ等しく、性差はない。つまり、公的、私的自意識に偏りは見られない。

④ 宗教意識は、女性の「宗教的信条」を除いてどの平均値も3.0より1%水準で有意に低く、やや否定的傾向(「あまり(そうではない)」)にある。特に、「宗教の価値」と「宗教的信条」について男性は女性より否定的である($t=2.79$, $df=140$, $p<.01$; $t=3.16$, $df=140$, $p<.01$)。つまり、社会福祉学部学生の宗教への関心は低く、その傾向は「価値」と「信条」において男子で強いと言える。

⑤ 生活感情では「対人関係」と「理想目標」がいずれも3.5以上の平均値を示して高く、「対人関係」では女子の方が男子よりも満足度が高い($t=2.35$, $df=140$, $p<.05$)。これに比較して「自己認知」と「現実認知」は3.0前後の平均と低くなっている。

(2) 尺度間の相関係数による関連性の分析

個人の尺度得点により各尺度間の相関係数を男女別に示したのが、表3(男子)、表4(女子)である。今回は相関係数以上の分析を行わないので、無相関の検定で有意であった尺度間の関係を男女別に図化したのが図2と図3である。ここでは、1%水準で有意な相関(逆相関)がある尺度間を——(⇔)で、5%水準で有意な相関(逆相関)がある尺度間を——(↔)で結んである。なお、生活感情に関する分析は後ほど行うので、ここでは生活感情を除いた12尺度の相互関連が示されている。これから、図2と図3によって関連性を検討していくことにする。なお、人間観の中で、平均値比較において社会福祉学部学生が高い値を示した「対人関係重視」と「個人の自立」に焦点を当てて、他の尺度との関係を見ていくこととする。図2と図3を見ると明らかなように、尺度間の関連構造は、男女で相当に異なっている。そこで、男女別に見ていく。

<男子の尺度間の相関関係>

① 「対人関係重視」は、「他者への信頼」、「ウチへの甘え」、「自己充實的達成動機」、そして「公的自意識」との間に $r=.36\sim.51$ の比較的高い相関を示している。他方、「個人の自立」、「私的自意識」とはほとんど無相関に近い。したがって、男子の「対人関係重視」は、「自

表 3. 各尺度間の相関係数 (男子)

* p < .05 ** p < .01 N = 51

	対人関係重視	日本ウチへの関係重視	日本の自己個人への関係重視	自己主義	達成競争的自己充実に	公的私的	宗教的価値	宗教的実践	対人関係	生活自己認知	理想目標
日本自己											
対人関係重視											
日本ウチへの関係重視	.40**										
日本の自己個人への関係重視	.51**	.23									
自己主義	.00	.05	.30*								
達成競争	-.33**	-.09	-.27								
自己充実に	.40**	.44**	.16	.23							
公的私的	.07	.12	.40**	.11	.11						
宗教的価値	.36**	.68**	.33*	.06	.28**	.18					
宗教的実践	-.09	-.27*	.07	.28**	.14	.46**	.56**				
対人関係理想	.03	.15	.20	.25	.08	.12	.39**	.19			
生活感情	.21	.12	.28*	.20	.25	.14	.34*	.25	.30**	.39**	.27
達成競争	.32*	.07	.44**	.02	.32*	.08	.35**	.04	.18		
自己主義	-.15	-.34*	.04	-.04	.09	-.04	-.30*	-.01	-.09		
公的私的	-.02	.14	.14	-.02	.07	.03	-.10	.05	.05		
宗教的価値	-.06	-.27	.22	-.16	.25	.01	-.11	.20	.11	.51**	
宗教的実践								.08			
対人関係理想											
生活感情											

表 4. 各尺度間の相関係数 (女子)

* p < .05 ** p < .01 N = 91

	対人関係重視	日本ウチへの関係重視	日本の自己個人への関係重視	自己主義	達成競争的自己充実に	公的私的	宗教的価値	宗教的実践	対人関係	生活自己認知	理想目標
日本自己											
対人関係重視											
日本ウチへの関係重視	.13										
日本の自己個人への関係重視	.46**	.09									
自己主義	.22*	.18	.06								
達成競争	-.20**	.37**	-.19								
自己充実に	.43**	.07	.26*	.44**							
公的私的	.06	-.20	-.09	-.00	.18						
宗教的価値	.23*	.37**	.07	.03	.13	.05	.50**				
宗教的実践	.24*	.03	.04	.45**	.38**	.09	.31**				
対人関係理想	.32**	.10	.15	.14	.26*	.26*	.23*	.26*			
生活感情	.27**	.06	.24*	.21*	.03	.22*	.28**	.13	.33**		
達成競争	.12	.13	.07	.10	.12	.13	.13	.13			
自己主義	.36**	.02	.50**	.18	.28**	.09	.00	.03	.21*	.15	
公的私的	.16	.19	.14	.22*	.19	.06	.06	.12	.32**	.07	
宗教的価値	.08	.38**	.08	.18	.11	.27**	.25*	.08	.46**	.46**	
宗教的実践	.31*	-.24*	.26*	.33*	.28**	.22*	.10	.24*	.29**	.52**	
対人関係理想											
生活感情											

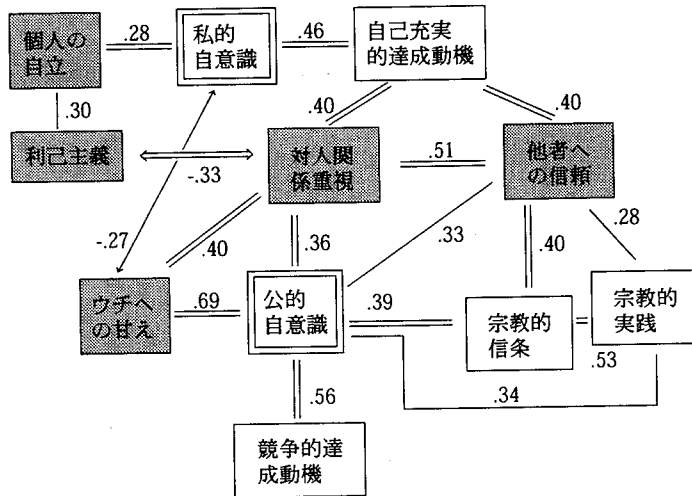


図2. 尺度間の相関関係 (男子)

注. 1%水準で有意な相関を \equiv 、5%水準で有意な相関を \equiv で表示。
 1%水準で有意な逆相関を \longleftrightarrow 、5%水準で有意な逆相関を \longleftrightarrow で表示。

分が他者からどう見られるかを気づかい、ウチとソトを使い分けてウチに甘え、他者を信じてその関係の中で自分なりの達成を行う」という日本社会に伝統的な対人関係志向であることを示唆している。

② 「個人の自立」は、「私的自意識」と「利己主義」との間には $r = .30$ の相関を示すのみで、「公的自意識」、「対人関係重視」、「ウチへの甘え」とはほとんど無相関に近い。しかも、「利己主義」は「対人関係重視」と、「私的自意識」は「ウチへの甘え」と $r = -.30$ 前後の逆相関を示している。したがって、男子の「個人の自立」は、「集団と距離を置き、自分の内面的な気持ちや意見に忠実でありつつも、自分中心に他者と対抗していく」自己本位の個の確立であることを示唆している。

③ 以上から、男子は「対人関係重視」と「個人の自立」を平均的には高く評価しながら、両者が個人の中で、あるいはタイプの違いという形（個人間）で統合できずにいる、そうした矛盾葛藤の中にあると解釈することもできよう。

④ 「宗教的信条」と「宗教的实践」は、「他者への信頼」、「公的自意識」とそれぞれ $r = .30 \sim .40$ の相関を示している。他方、「私的自意識」とは有意な相関を示していない（サンプルが男子で少ないことも考慮すべき）。したがって、男子の宗教意識は、「素朴な人間肯定に基づく伝統志向の表面的なもの」に留まっていることが示唆されていると言えよう。

<女子の尺度間の相関関係>

① 「対人関係重視」は、「他者への信頼」、「自己充實的達成動機」と $r = .40$ 以上の比較的

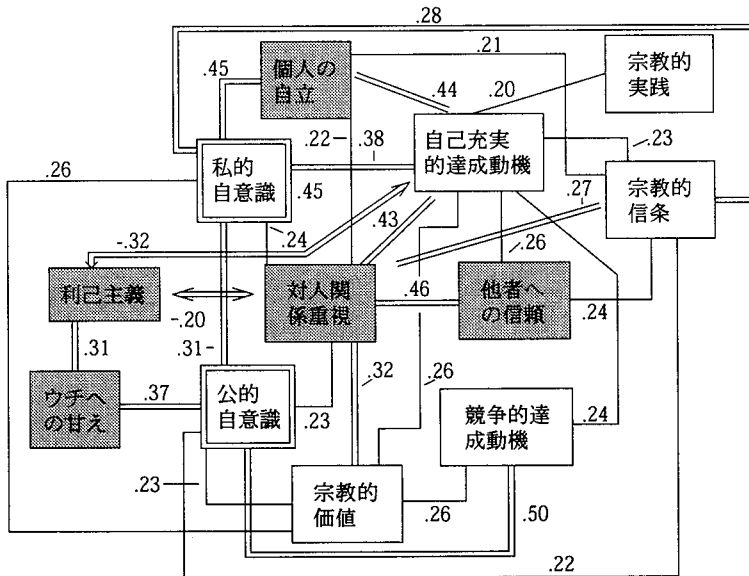


図3. 尺度間の相関関係（女子）

注. 1%水準で有意な相関を——、5%水準で有意な相関を——で表示。
1%水準で有意な逆相関を⇔、5%水準で有意な逆相関を↔で表示。

高い相関を示し、かつ「個人の自立」、「私的自意識」、「公的自意識」とも $r = .20$ ほどのやや低い相関を示している。しかも、女子では「私的自意識」と「公的自意識」とがほぼ $r = .30$ の相関を見せている。

② 「個人の自立」は、「私的自意識」とのみでなく「自己充實的達成動機」とも $r = .40$ 以上の比較的高い相関を示している。かつ「対人関係重視」とも低い相関している。以上から女子は、「本音と建て前の分離（私的と公的自意識間の葛藤）が比較的少なく、対人関係を志向しながら、個人の確立を自分なりの達成基準の中で統合的に行っている」という点が示唆されていると言える。女子は、「個人の確立」と「対人関係重視」の双方を高く評価しつつ、その総合をはかれているように見える。男子と対照的である。

③ 「利己主義」は、「自己充實的達成動機」とほぼ $r = -.30$ 、「対人関係重視」と $r = -.20$ で逆相関し、「ウチへの甘え」と $r = .30$ 以上で相関している。しかも、「ウチへの甘え」は「公的自意識」と $r = .37$ の相関を示している。したがって、女子において葛藤があるとするならば、「自分なりの基準で達成していくことと、利己主義的な甘え」との間の葛藤である可能性がある。

④ 「宗教的価値」、「宗教的信条」は、「対人関係重視」、「公的自意識」と相関すると同時に、「私的自意識」、「自己充實的達成動機」（これは「宗教的実践」）とも相関している。しか

も、「宗教的信条」は「個人の確立」とも相関する。したがって、女子は男子と対照的に「宗教を個人の自己確立や生き甲斐と関係する内面的なもの」として捉えていると言えよう。

(3) 生活感情の満足と各尺度との関係の分析

人間観等の12尺度は、生活感情の4領域の満足とどのような関係にあるのだろうか。表3と表4の、12尺度と生活感情4尺度との相関係数を手がかりに分析していきたい。生活感情の4領域ごとに、男女別に検討していく。

① 「対人関係」の満足度は、男子では、「対人関係重視」、「他者への信頼」「自己充実的達成動機」と $r = .32 \sim .44$ で相関して、「利己主義」とは $r = -.28$ で逆相関、「ウチへの甘え」、「競争的達成動機」、「私的自意識」とはほとんど無相関である。同様に女子でも、「対人関係」は、「対人関係重視」、「他者への信頼」、「自己充実的達成動機」と $r = .28 \sim .50$ で相関し、「利己主義」とは $r = -.26$ で逆相関、「ウチへの甘え」、「競争的達成動機」、「私的自意識」とはほぼ無相関である。男女で異なるのは、男子では「公的自意識」と $r = .35$ で相関、「個人の自立」とはほぼ無相関であるのに対し、女子ではそれぞれ無相関、有意でないが相関を示している点である。また、女子では、「宗教の価値」、「宗教的信条」と相関しているのに対し、男子では少なくとも「宗教の価値」ではほぼ無相関である。以上の結果は、対人関係の満足を得るためには、男女共通に日本社会に伝統的な、対人関係重視で他者信頼的な姿勢を持つ必要があり、競争的いわんや利己的であっては適応的でないということを示唆している。特に、男子の方がその気づかいは大きいようである。

② 「自己認知」の満足度は、男子では、「ウチへの甘え」、「公的自意識」と $r = -.30$ 以上で逆相関、「対人関係重視」とも有意でないが逆相関、他の尺度とはほぼ無相関である。ところが女子では、「ウチへの甘え」は逆相関だが有意ではなく、「公的自意識」とはほぼ無相関で、「個人の自立」と有意な相関を示し、「対人関係重視」、「他者への信頼」、「自己充実的達成動機」と有意ではないが低い相関を示している。この結果は、自己認識が男子では、日本社会に伝統的な他者の視線に敏感で、他者に甘えることに背を向ける形で促進されているのに対し、女子ではそうしたかたくなさはなく、人間関係の中で、自己確立を自分なりの基準で進める中ではかられていることが示唆されている。また、ここでも女子では「宗教の価値」と「宗教的信条」が「自己認知」と相関するが、男子ではそうではなかった。

③ 「現実目標」の満足度は、男子では、どの尺度の間とも有意な相関がない。「ウチへの甘え」と「公的自意識」で極めて低い逆相関、「他者への信頼」で極めて低い相関が窺えるのみである。これに対して、女子では「ウチへの甘え」、「競争的達成動機」、「公的自意識」との間に $r = -.25 \sim -.36$ の有意な逆相関が認められる。日頃の生活の張りについて、女子では甘えと競争志向を示す者がその程度が低いという傾向が認められるが、積極的な関連は見えない。先に見たように、「現実目標」は社会福祉学部学生においては平均的に、中立点（「どちらともいえない」）という低い水準に留まった。この結果は、彼らが大学という新しい環境の中で、入学

後7カ月を経ているとはいえ、具体的な目標を見いだしていないということの反映であろう。

④ 「理想目標」の満足度は、男子では、どの尺度の間とも有意な相関がない。サンプル数が少ないためと考えられ、「他者への信頼」、「自己充実の達成動機」、「私的自意識」との間では $r = .20$ 代の相関が認められ、「ウチへの甘え」、「個人の自立」、「利己主義」では $r = -.16 \sim -.27$ の低い逆相関が見られる。他方女子では、「対人関係重視」、「他者への信頼」、「個人の自立」、「自己充実の達成動機」、「私的自意識」、「宗教的信条」で $r = .24 \sim .33$ の有意な相関が認められ、「ウチへの甘え」、「利己主義」、「競争的達成動機」との間では $r = -.22 \sim -.27$ の有意な低い逆相関が見られる。将来の理想目標達成について女子は、競争志向・利己主義と甘えを脱し、対人関係への志向性と個の確立をはかる者が、肯定的イメージを持つという明確な関連が出ている。しかし、男子では内面性と対人関係への志向は窺えるものの、個の確立を志向する者がこの側面で否定的イメージを持つらしいという、対照的かつ曖昧な関連性しか見いだせない。社会福祉学部学生男子の自己形成は、多々困難を含むようである。

3 青年期にみられる特性からの展望

ここでは、本調査の対象者が青年後期に位置しているという視点から、結果を考察してみることとする。

(1) 青年期における自己形成

本調査の結果(1)―③に見るように、青年後期に位置している社会福祉学部学生に公的自意識、私的自意識ともに自意識の高まりが認められる。青年期はしばしば自己を確立する時代であるといわれてきた。青年は第二性徴にともなう身体の急速な変化を体験する。また、子どもから大人への過渡期として社会的に期待される役割の変化に直面する。そのような中で青年は、「自分とは何か」「何のために生まれてきたのか」「どこへ行こうとしているのか」「そこに至る可能性はどうか」といった自己意識を高め、自己を形成していくとされている。エリクソンは、自分が自分であることを確信するという心的過程を自我同一性としてとらえ、自我の確立が青年期の中心的な課題であると考えている。

本研究で取り上げた尺度間（人間観、達成動機、自意識、宗教意識、生活感情）の相関係数による関連性の分析を全体的に眺めてみると、青年期の自己意識の構造や自己形成の過程は、多面的、多次元的事実であることが予想される。加藤（1977）は、自己受容と自己批判、自己の開放性と閉鎖性、自己の独立性と依存性という3つの側面から青年期に特有な自己意識の特徴とその構造を明らかにしている。また平石（1990）は健康と不健康、対他者と対自己という2つの両極性を軸として、青年期心性と心理学的健康を明らかにした研究で、青年期における自己意識の構造は多面的、多次元的事実であることを示唆している。

(2) 日本の自己と西欧的自己

結果(1)―①に示した通り、社会福祉学部学生は、「対人関係重視」と「個人の自立」がいずれも高い。「対人関係重視」や「他者への信頼」という日本的自己観をもつとともに、「個人の自立」を高く評価し、西欧的自己を合わせもっている。この結果は、高田らの研究(1995)における青年が「相互依存的自己理解」(＝「対人関係重視」)が「独立的自己理解」(＝「個人の自立」)を圧倒する傾向をもっているのとは異なり、成人女性の傾向と一致する。「対人関係重視」と「他者への信頼」は、いずれも「間人主義」にもとづく日本的自己観である。「間人主義」は、他者との関係の中で自分を意識し他者との間柄を自分の一部と考える。自分と他者は互いに独立した別個の主体ではなく、自分の存在の基盤の一部は、他者にあるという自己観である。「個人の自立」は「個人主義」にもとづく西欧的自己観である。自分自身が基本的に他者と分離していると考え。親のように密接な関係にある他者でも、自己はあくまでも他者から分離していて、自己の中心的側面は他者に関係なく自己の内側にあるという自己観である。

高田ら(1995)は、「青年は現行の社会システムに適合した自己のあり方を積極的にとりこもうとしている可能生が示唆される」と考察するとともに、「日本的自己には個人主義的人間観も重要な要素として含まれている可能性」を指摘している。したがって、本研究の結果と高田らの青年が示した結果との不一致は、「はじめに」でも述べたように社会福祉を専攻する者と大学生一般の特質の違いである可能性もあり、今後の検討課題のひとつである。

高田(1992)によると、マークスと北山は、自己には文化の違いに関係のない普遍的な側面と文化によって異なる側面があることを指摘している。この文化によって異なる側面も必ずしも質的なものではなく、量的なものとしてとらえられる可能性を示唆している。したがって、一方の側面が優勢であれば他方は微弱になると指摘しているが、この点、本研究における結果は一致しない。日本的自己と西欧的自己は両極を軸とする一次元上でとらえられる概念ではなく、筆者らが日本的自己を個人主義にもとづく自己と対置してとらえていないことの妥当性が示唆される。

(3) 社会福祉学部学生にみられる「対人関係重視」と「個人の自立」

結果(2)示した通り、「対人関係重視」と「個人の自立」を核として、尺度間の関連をみるとそこには相当な性差がみられる。男子の「対人関係重視」は、日本社会に伝統的な対人関係志向であることが示唆され、この結果は高田らのそれと一致する。「自己の自立」を志向し、私的自意識と自己充実達成動機の高い者も一部存在する。しかし、この「自己の自立」を志向する者は、利己主義の考えを重視しているのが特徴である。社会福祉学部男子学生は、一般の大学生と同様に強く現代の社会に規制されており、高田らが考察したように、現代の社会システムに適合した自己のあり方を積極的にとりこもうとしている可能性が示唆される。

他方、社会福祉学部女子学生は、本音と建前の葛藤が比較的少なく、対人関係を志向しながら

ら、個人の確立を自分なりの達成基準の中で統合的に行なっていることが示された。「対人関係重視」と「個人の自立」の双方が同時に優勢である者はふたつの側面を統合し、成熟した自己を形成しつつあると考えることもできる。また、この自己のあり方は、日本的自己を個人主義にもとづく自己と対置してとらえていない概念と合致する可能性も考えられる。

4 宗教意識と人間観

現代日本人の人間観は、根底的には何によって形成されているのか。このテーマを含む、いわゆる日本人論は多数存在し、このこと自体が日本人の特質ともされている。日本人論の系譜に関しては、南博『日本人論』に詳しいが、南は同書序説で日本人論（国民性）研究の方法論として5項目をあげている。このうち「歴史的な観点による日本人論」は、国民性の「中核となる本質的な部分が、歴史のどの段階で形成され固定され、社会心理的な伝統として今日まで引き継がれてきたか」について検討するとされている。いま、本章では日本史上の時代・文化特徴が日本人の思考特性（国民性や人間観など）に与えた影響を明らかにしようとする方向性の予備的検討として、標記本学調査に見られる若年層における宗教意識を明らかにし、若干のコメントを付すものである。

(1) 日本人の宗教状況

本学調査の検討に先立ち、一般的調査から日本人の宗教状況を明らかにしておきたい。

いま、日本人の考え方は、どれだけ伝統に影響されているのだろうか。NHKの『日本人の宗教意識』（'71NHK調査）によれば、伝統が自分の考え方に影響があるとする者は67.5%（16～19歳43.6%）であり、若年層においても4割以上の多くが伝統の影響を自覚的にとらえている。伝統の自覚内容は種々であろうが、近世以前において伝統を形成してきた主要な柱の1つが宗教であったことは否定しがたい。ここで宗教という場合、それは特定の宗教宗派や宗教教義ではなく、古代社会以来民衆の中に形成されていった日本的宗教心情とでも言うべきものであって、当然ながらその理解は個々の宗教の正当性とは相違する場合もあり得るのである。

さて、日本人の宗教状況については、総宗教人口が総人口に倍する数にのぼることが日常的に指摘されている。しかし、'71NHK調査他の調査からはこの宗教人口の多さと錯綜する結果が示されている。今、そのいくつかを例示するならば以下の通りである。

まず、'71NHK調査によれば、具体的に信仰を有している割合は32.9%（16～19歳16.5%）であり、特に若年層の割合は全体の1/2であって、若年層の8割以上が無信仰であると回答している。これに対して、自己の信仰の有無とは関係なく、宗教が必要であると考えている割合は71.9%（16～19歳59.8%）であり、前の個人的信仰の有無と比較すると、全体で2倍以上、若年層では3倍以上の肯定的回答が寄せられており、個人的な信仰実践と一般的な宗教認識と

の間に大きなずれが生じているのである。なお、宗教が必要とされる理由としては、①心の支え66.2% (16~19歳61.7%)・②道徳性の教化45.0% (16~19歳51.1%)・③現世利益祈願30.4% (16~19歳27.7%)・④冠婚葬祭儀式23.9% (16~19歳21.3%)の順であり、①②が高率を得たことは宗教が一般的に有している人間の内面性・精神性への関与が期待されている結果であると考えられるが、特に若年層においても全体と同様の結果であることは、彼らの宗教意識及び人間観等の意識を考察する上で注目されるものであろう。

次に、NHKの『日本人の意識』('78NHK調査)によれば、日本人の具体的な宗教行動のパターンは、現世利益を含まない活発な活動14.1% (16~19歳6.7%)、現世利益を含む活発な活動17.7% (16~19歳9.8%)、現世利益のみ37.4% (16~19歳59.7%)、墓参りのみ15.8% (16~19歳7.3%)、無行動11.7% (16~19歳13.2%)であり、日本人の宗教行動の多くが現世利益を期待した身体健全他の祈願、縁起物の所持、おみくじ・占い等であることが理解されるのである。

ここでは、2種の調査結果の中のわずかな項目であり、全体像を示すことは出来ないが、大まかには現世利益を追い求めるが、信仰はあまり活発でなく、それにもかかわらず宗教的なものに精神的支柱を求めるといふ、矛盾的とも思われる日本人の宗教意識が見られるのである。この状況は別の角度から考えると、日本人が宗教信仰と宗教的心情を別個に捉え、信仰を拠所とするのではなく、宗教的心情を拠所としているとも言えるのではないだろうか。

(2) 立正大学社会福祉学部学生の宗教意識からの考察

さて、宗教に心の拠所や道徳性教化を求める宗教意識とその他の意識はどのように関連するのであろうか。この観点から標記本学調査においては、宗教意識尺度として表1の通り「宗教の価値」(No.73—79)・「宗教的信条」(No.80—85)・「宗教的实践」(No.86—91)の3項目を5件法で問い、先の「調査結果」(1)の④の通りの結果を得た。そこからは、本学学生(平均18.9歳)における宗教意識の低さが伺えるが、性別的には特に男子における宗教意識の低さが理解されよう(表2・図1参照)。この宗教意識の低さは本学学生のための特殊性ではなく、'71NHK調査の若年層の有信仰率(16.5%)と同様の傾向を示しており、20歳前の若年層における一般的傾向として、自覚的な宗教信仰や宗教行動はあまり見られないということであろう。しかしながら、本学調査の男女とも「信条」の否定度が「価値」、「実践」に比べて少ないのは、前節でも見たように、本学学生においても自覚的な信仰ではなく宗教的心情への依拠の度合いがやや高いということであろう。また、宗教意識と日本的自己等の項目との相関関係は表3・表4・図2・図3の通りであり、男女別の傾向は各「尺度間の相関関係」に述べた通りである。ここからは、男子においては「他者への信頼」および「公的自意識」と宗教意識との関連が見られるに過ぎないのに対し、女子では「ウチへの甘え」・「利己主義」及び「現実目標」を除く各項目との関連が見られ、女子において宗教を自己確立等と関連する内面的存在と捉えていることが理解できるのであった。

本学学生のこのような宗教意識の傾向の中で、特に全体的に注目されるのは宗教意識と自己充實的達成動機との相関、間人主義の対人関係重視・他者への信頼との相関等である。つまり、他者を信頼し人間相互の関わりを大切にしながら、自己の達成目標の実現を図る生き方と、宗教意識が関連しあっているということであろう。もちろん個人差や性別差による成熟度の格差が大きい問題であるが、個人の課題達成動機や対人関係のあり方と宗教意識が相関性を有していることは注目されよう。何故なら、人間が集団の中で社会的関係を有して存在している以上、当然他者との関係をいかに展開するかが重要な問題となるからである。この点に関して、現代の競争社会において展開されてきた西欧的（もしくは疑似西欧的）価値観はややもすると行き詰まりを示しており、また日常的にそれと対置されている筈の日本的価値観は戦後において宗教的価値観を過小評価する方向に進んできており、その結果、現代日本に支配的な価値観は日本的宗教的心情を排斥しがちである。しかし、対人関係理解や達成動機が宗教意識と相関性を有することは、今後の日本的な（つまり日本の文化・風土・歴史等を背景とした）人間観等を考察する場合に宗教意識・宗教的心情の分析が必要であることを提示しているのであって、今後の人間観等を含む価値観考察に有益な方向性であろう。その具体的対象は、神道（およびここにまとめられた原初的宗教心情）、3世紀頃に伝来したとされる儒教、6世紀半ば伝来の仏教、16世紀頃のキリスト教、及び説話等によって流布されてきた心情等々に及ぶものであるが、先にも述べたように、それは特定宗教教義を検討するのではなく、これらの宗教および説話文学他によって民衆の中に形成されてきた日本の宗教心情であり、'71NHK調査の伝統からの影響の自覚から言っても、それらはおそらく時代的変遷を経て現代社会のわれわれの人間観に、そして国民性に何らかの影響を与えているのであって、それへの考察を抜きにして人間観等を語るのは困難であろう。

5 おわりに

これまで、立正大学社会福祉学部学生に対する予備的調査の報告を中心として、彼らの「人間観」の特徴について若干の考察を加えてきた。そこでは、現代の若年層における人間観が幾分なりとも浮かび上がってきたように感じている。ただ、本学調査は、社会福祉を指向する学生、それも女子学生が2/3を占める集団という母集団の特性があり、一般化して語るのには若干困難が伴っている。それ故、今後は調査対象を他の専攻領域の学生、成人層、および老人層へと拡大し、さらなる調査検討によって、当該課題の解明を進めていく所存である。

そうした現代日本の多世代にわたる「人間観」の解明、さらに社会福祉に従事する人々の「人間観」の解明を通じて、「日本的自己」をふまえた社会福祉の方法論的原理の探求を進めることが、その次の課題となる。

引用文献

- (1) 土居健郎 1971 「甘え」の構造 弘文堂
- (2) 藤田雅子 (編著) 1990 福祉カウンセリング 日本文化科学社
- (3) 浜口恵俊 1982 間人主義の社会日本 東洋経済新報社
- (4) 平石賢二 1990 青年期における自己意識の構造—自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康— 教育心理学研究, 38号, 320—329
- (5) 堀野緑・森和代 1991 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因 教育心理学研究, 39号, 308—315
- (6) 加藤隆勝 1977 青年期における自己意識の構造 心理学モノグラフ No.14 東京大学出版会
- (7) 南博 1983 日本の自我 岩波書店
- (8) 南博 1994 日本人論—明治から今日まで— 岩波書店
- (9) 日本放送協会世論調査所編 1978 第2日本人の意識—NHK世論調査— 至誠堂
- (10) 総理府青少年対策本部編 1978 世界の青年との比較からみた日本の青年—世界青年意識調査 (第2回) 結果報告書— 大蔵省印刷局
- (11) 菅原健介 1984 自己意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 教育心理学研究, 第55巻, 3号, 184—188
- (12) 高田利武 1992 他者と比べる自分 サイエンス社
- (13) 高田利武・松本芳之 1995 日本の自己の構造—下位様態と世代差— 心理学研究, 第66巻, 3号, 213—218
- (14) 内田圭子 1990 青年の生活感情に関する一研究 教育心理学研究, 38号, 117—125